

調査研究の範囲・実施方法

マルチメディアにおける音の利用も、新しい試みが少しずつ行われ始めた。しかし、対人間にベクトルを合せると、誰もが不自由なく利用出来る段階への道は厳しく遠い。

情報システムを介した人間相互のコミュニケーション、それも人間の都合に合わせて音を利用出来る形態に発展することが望まれる。本報告書ではその様な現実的な環境を目標にすると何が問題か、どうすれば良いのかを考察した。

調査の主眼は、ネットワークとパソコンを軸とした音の利用に置いている。又、学術的な調査というよりも、市民生活とマルチメディアとの接点を見据えた音利用の展開・発展の方向性を調査した。

他にも重要な要素として教育・医療・セキュリティ・著作権・ボーダレス・データベース化・エレクトロニックコマース・ホームバンキング・コンピュータテレホニー・通信料金等々多くのキーワードがあるが、それらの検討はどれも多大な考察を必要とするものであり、他の機会に譲りここでは触れていない。

調査方法としては当財団が独自に文献等で調査する一方、関連する研究や事例を取材或いは実験したり、講演会・展示会等の調査を通じて総合的に検討した。

マルチメディアの進歩は犬の成長速度にたとえてドッグイヤーと呼ばれるように数ヶ月単位で変化し、印刷メディアでは追いつかない場合も発生する。調査日以降、既に変化していることも有り得るが、その時点での状況として捉えて頂きたい。